

# 「スイートピー」

廣瀬清一 事務局

1月下旬のまだ寒さ厳しいなか、コロナ禍のふさいだ気持ちでいつもの商店街を歩いていた。すると花屋の店先に、軽やかな淡いピンクの蝶のような可愛らしい花を付けたスイートピーがふと目に留まった。

花の入った花桶の脇に『ほんのりと春の甘い香りを漂わせるスイートピー・・・入荷しました・・・1月21日は、スイートピーの日』と手書きのポップ看板があった。

一説によると

『春色の汽車に乗って海に連れて行ってよ・・・

素敵の人だから

心の岸辺に咲いた赤いスイートピー』

と歌詞にある『赤いスイートピー 松田聖子』の発売日(1982年)にちなんで1月21日が『スイートピーの日』になったという。

スイートピーの花は、時代と共に濃い色から淡い色へ、単色から複色へ変化している。花卉統計によると、赤色系の割合が1950年代では60%を占めていたにもかかわらず、レコードが発売された頃には僅か5%以下になっていた。

最近、花屋で見かけるスイートピーは、パステル調のピンク、パープル、ブルーそしてアイボリー、ホワイトの他に濃い赤、赤紫、青、さらに混色といろいろなバリエーションがあり、ステム(花軸)が長いのが特徴。1月～3月がピークで、ウェディングブーケ、プレゼントの花束として春先を代表する花となっている。

さて、どんな匂いなのかと鼻を近づけてみた。ほのかにフローラルとフルーティな香りが感じられた。香りは思ったほど強くはなかった。いつまでも嗅いでいられないのでその場を離れた。

スイートピーは、マメ科レンリソウ属の蔓性一年生草本。名前のおと「Sweet pea 香りのよい豆」ということ。「豆」とあるが、毒性があり食べられない。



スイートピー

学名は *Lathyrus odoratus* である。*Lathyrus* は、「非常に(1a)と刺激する(thyros)」を意味し、催淫性があると信じられていた。また、*odoratus* は、「芳香のある、香りのいい」を意味している。

和名では、麝香豌豆(ジャコウエンドウ)や香豌豆(カオリエンドウ)、麝香連理草(ジャコウレンリソウ)などといい、花の良い香りから名付けられている。

原産国はイタリア(シシリー島)で、島には夏咲きで香りが強い比較的色の濃い赤紫、紫や青色の花が自生している。

17世紀になり、ヨーロッパを中心に各地で盛んに品種改良が行われた。その功績でヘンリー・エックフォード Henry Eckford は、スイートピーの父と呼ばれている。

こうした改良によって、草丈(高性、中性、矮性)、花形(フード、オープン、ウェーブ)、花色、開花時期(夏咲き、春咲き、冬咲き)の違う魅力的な種類がたくさん誕生した。

日本へは、アメリカより19世紀に入ってきている。

花の特徴としては、チョウが羽根を広げたような左右対称の美しい形をしている。



Sweet Pea "Familiar Garden Flowers"  
F. Edward Hulme 1884 Cassell 社

この花の形は、「蝶形花(チョウケイカ)」と呼ばれる。多くのマメ科の花に共通していて、受粉をしてくれる昆虫(ポリネータ)を呼び込むために進化したと考えられる。ところが、品種改良の進んだエンドウやスイートピーは蝶形花であるにもかかわらず、昆虫を呼び込む密腺もなく、花の香りも薄くなっている。

これらは自花受粉(同じ花の中の花粉で受粉する)で種子を作る。雄蕊と雌蕊は花びらに包まれており、蕾のうちに葯が割れ、花が咲く頃には受粉が終わっている。

スイートピーは、開花時期によって「夏咲き」、「春咲き」、「冬咲き」と3つに分けられる。

・夏咲き(6~8月に開花)

フレッシュ感とグリーン感のあるローズ(Geraniol、Phenylethyl alcohol、Phenylethyl acetate)の要素を持ったヒアシンス様の香り。香りは強い。

(かなり前には、花からアンフルラージュ(冷浸法)で香料を抽出していた。オレンジブロッサムとかブドウ(Methyl anthranilate)、ローズのニュアンスがあるヒアシンス様の香りである。)

(原種に近い夏咲き)

ローズ感は少なく、ヒアシンス(Phenylacetaldehyde)と、ややジャスミンとかアニマリック(Indole、Isovaleric acid)な感じを伴い、さらに幾分スミレ(Nonanal、Heptanol)を想わせるやや濃厚な香り。香りは強い。)

・春咲き(4月~6月、園芸)

スパイシー(Methyl salicylate)と、グリーンでフルーティ(Methyl hexanoate、Prenyl acetate)な、みずみずしいフレッシュ・フローラル(Linalool、Methyl benzoate、Acetophenone)な香り。

・冬咲き(1月~4月、切り花)

ヒアシンス(Phenylacetaldehyde)とローズ(Geraniol、Geranyl acetate、Nerol)に加えフレッシュフルーティ(Methyl hexanoate)なニュアンスを持った爽やかなフローラルな香り。香りは弱い。

品種改良を重ねていくにつれて本来のグリーンやアニマリックの特有の香りが薄れて、フローラルな香りへと変化してきたのではないかとされている。

残念なことに、最近の切り花のスイートピーの約8割は、香りが弱い。

こうした状況の中、スイートピーの原種を用いて香りの強い品種が作られている。

今日コロナ禍によって、見た目や高機能性を求めてきた社会の価値観が変わろうとしている。

花においても、単に花の色や形の美しさを追求するのではなく、触れて、嗅いでさらに育てるといった五感で楽しむ方向へと変わっていくのではないだろうか。

3月になりスイートピーの苗を購入した。思いのほか早く成長している。4月下旬には、どんな花が咲き、どんな香りが嗅げるのかと思いながら日々の世話をしている。これもなかなか楽しい。

参考文献

- 1) 中村薫 「スイートピーにおける遺伝資源の解析と育種的利用に関する基礎研究」 宮崎県総合農業試験場研究報告 50、1-47、2016-3
- 2) 香料 232、154-156、2006-12 日本香料協会
- 3) 井上知昭 「スイートピーをつくりこなす 連続採花による安定生産技術の実際」 農山漁村文化協会 2007
- 4) 大田花卉 「香りの提案 花の香りの調査研究」 <https://www.otalab.co.jp/fragrance/>

(その後)

3月に植えたスイートピーの苗は順調に育ち、4月下旬には巻きひげを伸ばしてかなり背が伸び、花芽を付けたはじめた。そのため、支柱からネットに換えてやった。

5月に入り、ポツポツ咲き始めた。

花屋の冬咲きのスイートピーとは違って、花茎は柔らかく短い。花びらは小ぶりで丸味を帯びてかわいらしい感じがする。

肝心の香りはというと、花屋のスイートピーは甘い香りと言われていたが、こちらはみずみずしくフレッシュでグリーンな感じのローズ様の香りがする。思っていた以上に強く良い香りである。次々に花芽が上がってきていて、しばらくは楽しめそうである。

咲いた花は5、6日で萎み、驚いたことに直ぐに鞘になり始めた。

種が出来たら秋に播種からやってみようかと思う。



春咲きスイートピー